国語（その一）

第一問　次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

研究？　わくわくするなあ。(注1)べてるの家で「研究」が始まった。A心の中を見つめたり、反省したり……なんてやつじゃない。どうにもならない自分を、他人事のように考えてみる。仲間と一緒に笑いながら眺めてみる。やればやるほど元気になってくる、不思議な研究。だから合言葉は、自分自身で、共に。

この文章は、「当事者研究」という言葉を世に広めるきっかけとなった本、浦河べてるの家『べてるの家の当事者研究』の帯に書かれたものである。精神の病を抱える当事者たちが自分の抱える問題についてB自分たちで研究する。自分の問題を仲間の前で発表し、参加者全員でその問題の仕組みや対応策について考え、実践する。このような活動が「当事者研究」である。このべてるの家の活動をきっかけに、当事者研究は、発達障害、脳性麻痺、吃音、依存、ひきこもり、ホームレスなどさまざまな領域に広がって発展しつつある。こうした活動を報告しあう「当事者研究全国交流集会」もおこなわれている。

（中略）

当事者研究はなぜ「研究」というかたちをとるのか。浦河べてるの家で当事者研究を始めた向谷地はそれが誕生したときのことを次のように述べる。

従来、〈研究〉は、医師や研究者がするものであって、当事者は［イ］に入る余地のないものでした。しかし研究の分野こそ当事者性を打ち立てるべきではないか、と思います。私たちが〈研究〉と言っているものは、「自分の内面を見つめなおす」とか「反省する」とは違うものです。自分を見つめなおす、というのは従来のカウンセリングの場でもおこなわれてきたことであり、非常にプライベートな作業です。

とくに(注2)河崎寛さんは、自分を見つめなおすということを、これまでさんざんやってきた人です。そして、自分を見つめ、自分の弱さに直面する反作用として、爆発をはじめとするさまざまな逃避的行為を繰り返していました。

そこで彼に対してこう提案しました。

「自分を見つめないといけないね。だけど、もっと自分に深く迫る方法として、〈研究〉という方法があるよ」と。自分を見つめるというのを〈研究〉という言葉に置き換えたら、彼は「やってみようかな」と興味がわいたようです。

国語（その二）

「見つめなおす」、「反省する」ではなく、「研究する」。この言葉の置き換えの意味はきわめて大きい。「見つめなおす」、「反省する」は、その行為の結果をふまえてすぐに自分を修正しなければならないような義務感を伴う。それに対して、「研究」はああでもないこうでもないと議論しながら、何かを発見することが大事で、それをふまえてすぐに修正しなければならないわけではない。冒頭に引用した文章のように、それは「他人事のように」自分のことを考える独特の距離感と余裕をもたらす。

「研究する」ことのもうひとつの意義は、その研究結果が同じ問題で悩む他のひとの役に立つかもしれないという点である。「研究という形をとることで、生きづらさをかかえて爆発している多くの仲間たちを代表して、そういう仲間たちと連帯しながら、自分のテーマに迫っていける」のである。「見つめなおす」、「反省する」が個人に閉じた「私的」行為であるのに対して、「研究」はその成果が他者と共有されることを目指しており、その意味で「公共的」である。

さらに、仲間に向かって語り、仲間の意見を聞きながら共におこなう「共同研究」という形式がこの公共性をより確かなものにする。「つらい作業でしかなかった「自分を知る」という行為が、チームというクッションの上での『楽しいゲーム』に変わる。」そして、「無意味にしか思えなかった失敗だらけの忌まわしい過去が、「自己研究」という衣をまとった瞬間、新しい人間の可能性に向かって突然、意味をもちはじめる」。修正すべきもの、恥ずべきもの、否定すべきものとして追いやられてきたものが、自分の新しい可能性を開き、他者と連帯するための貴重な資源として輝き始めるのである。

当事者研究は精神障害の領域から始まって、次に、発達障害と脳性麻痺の当事者たちによって独自の進化を遂げた。その大きな特徴は、

c自分の経験している世界についてのきわめて詳細な記述である。発達障害当事者である綾屋（あや）は自分の状態について次のように述べる。

体中がどくっどくっと脈を打っている。頭髪の生えている部分がかゆい。首筋から肩にかけて重い。胃が動かずに固まっている。左下腹部に空気が溜（た）まっている。足の指先が痛い……。私の体は、つねに細かくて大量の身体の感覚を私に届け続けている。その情報量の多さに私は圧倒されわずらわしく思いながらも、身体の訴えを一つひとつ聞き、その原因を探り、対処していく作業に追われている。

国語（その三）

現象学的記述を思い起こさせるような繊細な記述が積み重ねられていて、読む者を圧倒する。当事者が自分について研究する場合、まずは自分について詳しく語ることの重要性を知ることができる。こうした作業がおこなわれるようになった背景には、専門的知識だけでは十分に説明された感じがしないという当事者ならではの感覚があった。綾屋は、あるとき「アスペルガー症候群」という診断を受けたことで、それまでの生きづらさに説明がついたような感覚を覚える。しかし、しばらくすると、説明がつかない部分や足りない部分が気になるようになる。そして、友人である脳性麻痺当事者の熊谷に自分の話を聞いてもらい質問してもらうというかたちで、彼らなりの「当事者研究」が始まった。

このとき、彼らはまだべてるの家の「当事者研究」に出会っておらず、「当事者研究」という言葉も知らなかった。しかし、その後、べてるの家の活動を知り、自分たちのやってきたことが「当事者研究」なのだという認識を得る。そのときのことを綾屋は次のように述べる。「仲間がいるんだ」。「人に理解されない病気の苦労を長年かかえてきた仲間。専門家による描写や言説をいったん脇に置き、他者にわかるように自分の体験を内側から語る作業を続けている仲間」。

こうして、自分たちのやってきたことに名前が与えられ、同じような活動をする「仲間」の存在に勇気づけられて、さらに「研究」が進められていった。そして、当事者研究とは何かについて、次のような認識に到達する。

「当事者研究では、多数派の世界ではないことになっている現象に対して、新しい言葉や概念を作ることをとおして、仲間と世界を共有する」。「そして、そういった世界の共有だけで解決することは多いのだということに気づかされていく」。

ところで、べてるの家では何人もの仲間とともに「研究」をおこなうのに対して、綾屋らはたった二人だけでおこなっており、一見違うやり方のようにも見える。しかし、べてるの家でおこなわれていることと自分たちのおこなっていることに共通する要素を探っていくと、前述のような点が浮かび上がってくる。「ないこと」にされていて言葉が存在しない現象に言葉を与え、それを仲間と共有する。たとえ二人だけであっても、D新しい言葉を生み出してそれを共有することが当事者研究においてきわめて重要な要素であることがわかる。

さらに綾屋らは述べる。「当事者研究における日常生活は、正解がすでにあって、間違えたり失敗すると裁かれる「［　ロ　］」ではなく、仮説に従って動いてみて結果を解釈する「［　ハ　］」になる」。「反省」はそれが生かされないとさらに落ち込むが、

国語（その四）

「研究」は失敗しても何度でもやり直すことができる。「研究」のもつ独特の距離感と余裕をここでも確認することができる。

（野口裕二『ナラティヴと共同性　自助グループ・当事者研究・オープンダイアローグ』による）

（注１）べてるの家 ―― 北海道浦河町にある精神障害等を抱えた当事者の地域活動拠点。創立者は向谷地生良（いくよし）である。

（注２）河崎寛 ―― 統合失調症を患い爆発を繰り返していた患者。

※ 問題作成上の都合で、原文の一部に手を加えてあります。

問一 傍線部A「心の中を見つめたり、反省したり……なんてやつじゃない」とあるが、なぜ心の中を見つめたり、反省したりすることは否定されるのか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

① プライベートなことまで他者に立ち入ってこられることを、できるなら避けたいと思うから。

② 嫌なことを無理やりやらされ、自分を制御できなくなり、感情を爆発させることになるから。

③ 他のどんな方法よりも自分のことを深く知るようになり、自己嫌悪におちいってしまうから。

④ 自分の中に否定すべき点を見つけ出し、それを医師や看護師に報告しなければならないから。

⑤ どうにもならない自分をつきつけられ、しかも矯正することまで求められることになるから。

問二 傍線部B「自分たちで研究する」とあるが、なぜこのようなことを行うのか。五十字以内（句読点なども字数に含む）で答えなさい。

国語（その五）

問三 空欄**イ**に入れるのに最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

① 形式的　② 概念的　③ 制度的　④ 主体的　⑤ 規範的

問四 傍線部**C**「自分の経験している世界についてのきわめて詳細な記述である」とあるが、なぜこのようなことを行うのか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

① 少数者である自分たちの体験を語ることによって、広く知られていない自分たちの病気を認知してもらうことが重要であるから。
② 専門的な知識では自分の状態を十分に説明できず、当事者自身が自らの体験を他者にわかるように説明することが重要であるから。
③ 専門家による治療は不十分なものであり、当事者がお互いに力を合わせて自分たちだけで問題の解決を図ることが重要であるから。
④ 新しい言葉や概念をつくり出し、自分の症状を論理的に分析することで、読者を圧倒し、共感してもらうことが重要であるから。
⑤ 当事者自らが医学的研究を実際におこない、日常生活においてどのようなことが正解なのかを導き出すことが重要であるから。

問五 傍線部**D**「新しい言葉を生み出してそれを共有すること」とあるが、仲間と共に当事者研究をし、「新しい言葉を生み出してそれを共有すること」で、どのようなことが起きるのか。八十字程度の一文を本文中から抜き出し、最初と最後の五字を答えなさい。

問六 空欄**ロ**、**ハ**に入れるのに最も適切な組み合わせを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

① **ロ** 建前の場　**ハ** 本音の場
② **ロ** 試験の場　**ハ** 実験の場
③ **ロ** 現実の場　**ハ** 理想の場
④ **ロ** 実践の場　**ハ** 理論の場
⑤ **ロ** 中心の場　**ハ** 周縁の場

国語（その六）

問七 本文の内容と合致するものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

① 治療のためであってもつらいことをするのは嫌なので、当事者研究においては楽しいことをおこなうことを目指している。

② 医師がおこなう治療に失敗は許されないが、当事者研究は素人がおこなうため失敗が許され、それが治療に役立つこともある。

③ 医学は日々進歩しているが、専門家だけでは治療をすることができず、病気を治すためには当事者の力を借りる必要がある。

④ 言葉が存在しないと、現象としても存在しないことにされてしまうので、言葉を与え、仲間と共有することが重要である。

⑤ 当事者研究は言葉が重要な意味をもつために、精神障害の領域においてのみ有効性を発揮することができる方法である。

国語（その七）

第二問　次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

ＡＩと共存しながら人間らしく生きていくためには、生物としての野生の力も見直す必要があるのではないかと思います。

ぼくは、フィールドワークの最中に何度も死にかけました。それでもまだ生き残っているのは、もちろん運もあるけれど、野生の力、直観力も働いていたのかもしれないと思っています。

野生の世界というと、運がいいか悪いかで生死が決まるかのような印象があるかもしれませんが、ただの[A]行き当たりばったりとは違います。「行き当たりばったりを予測している」のが野生です。だから、何が起こってもおかしくないと思って身構えていないといけない。突然、ヘビが出てくるかもしれないし、イノシシが飛び出してくるかもしれません。とっさの判断が求められます。ただ、そこで必ずしも正解を導き出す必要はありません。不正解でなければいいのです。いくらでも方法はある。その中で、とにかく間違っても自分が死ぬようなことにならないようにする身構えが大切なのです。

たとえば、同じ種類のヘビでも、状況が違えば、行動は違いますね。警戒していなければ襲ってこないし、人間を敵だと思わなければ襲ってこない。大事なのは、そういうことを感じ取れるかどうか。たとえば、ジャングルを３人で歩くとき、ぼくは先頭を歩きません。[B]先頭には、ぼくが一番信頼できる優秀な地元の人間をつけます。先頭の人間が気づくかどうかで、ぼくたちがヘビに襲われる危険性が変わってくるからです。

ガボンでニシローランドゴリラの調査をしていたとき、ゴリラに襲われたこともあります。長らく研究してきたルワンダのマウンテンゴリラと彼らの行動文法が異なることをぼくが理解していなかったのです。しつこく群れを付け回していたぼくにイライラしたメス２頭が前後から襲ってきた。頭をかじられ、足を噛（か）まれて血だらけになりました。肉食動物が獲物を仕留めるときは、一瞬にして息の根を止めます。殺そうと思っているからです。でも、ゴリラは植物食ですから、ぼくを食べようとは思っていません。排除しよう、思い留（とど）まらせようと思って飛びかかってきているので、どこまでやるかはぼくの反応次第。戦おうという意思を示したら本気になるはずです。もしあのときぼくがジタバタしていたら、①ケンシを突き立てられ、頭に穴が開いていたかもしれません。そうしなかったのは、一瞬の判断でした。

人間も、言葉をしゃべるようになる前まで、こういう世界で身体も心もつくられていました。隠れているものを感じる能力も備わっていたはずです。京都大学の近くに「哲学の道」という場所がありますが、この道にもぼくの耳では感知できないものがたくさ

国語（その八）

んひそんでいます。見えている自然は、見えていないさまざまなものとつながりをもって成り立っていて、そのすべてのつながりの中に自分がある。そうしたつながりを感じる②ジョウチョを古来日本人はもち続けてきました。

ところが今、その心を失いつつある。フィクションの世界に住むようになった人間は、自分が知りたい情報だけを抽出して、あたかもそれが世界をつくっていると錯覚し始めています。インターネット社会の中で③クシされるのは視覚と聴覚だけです。目に見えないこと、耳に聞こえないことをないものとして排除し、見えるもの、聞こえるものだけで人間が住む世界をつくってきた結果、隠れているものがわからなくなりました。グーグルマップのようなナビゲーションシステムを利用しているとき、現実の五感で感じる世界はc二の次になっているのではないでしょうか。現代に生きるぼくたちは、バーチャル空間に生きているといってもいい。アフリカのジャングルのフィールドワークでスマホのＧＰＳ機能を使う学生を見て驚いたことがあります。ＧＰＳを使えば、自分の位置と目的地までの距離や方向がすぐに出てきます。だから、なるべくまっすぐ目的地へ向かおうとします。でも、その間には川や湿地帯、棘（とげ）のあるやぶや危険な動物がいそうな場所など、さまざまな障害があります。むしろ遠回りしたほうが安全に早く目的地に到達できる場合が多い。ＧＰＳだけに頼るとそういった判断ができません。【Ⅰ】

機械化、情報化が進む今だからこそ、dもっと人間本来の能力を発揮できる環境をつくるべきだし、少なくともそういう方向に進むように調整すべきだと思います。とりわけ子どもの頃に、人間としての自分の身体がどういう世界で生まれ、どんなふうにつくられているのかを自覚するチャンスが与えられなくてはいけない。そういう環境を与えるのはおとなです。【Ⅱ】

ぼく自身は、運がいいことに、部分的にでもそういう環境が与えられる少年時代を送ることができました。当時の東京・国立市にはまだ田園風景が残っていて、クヌギ林もありました。二次的自然であっても、今のコンクリートジャングルよりだいぶましでしょう。だから、大学に入って屋久島の原生林でサルを追い、アフリカの熱帯雨林でゴリラを追う生活の中で、人間の手の入っていない本物の自然と向き合うことで「人間というものが本来どんな生き物なのか」ということに気づく［イ］があったのだと思います。それは非常にありがたいことでした。【Ⅲ】

もっといえば、このまま情報化が進めば、人間は「考える」ことをやめるかもしれません。言葉が生まれたことで、人間の脳は発達をやめました。言葉が、視覚や聴覚、嗅覚を④ダンポしてくれるおかげで、人間は自分の五感として脳の中に記憶しておく必要がなくなりました。見たものや感じたことを言葉でラベルしておけば、何かを見たとき

国語（その九）

に言葉によって思い出すことができるからです。【Ⅳ】

さらに人間は、テクノロジーを発達させ、その記憶媒体を大容量にしました。友だちの連絡先どころか、自分の携帯電話の番号さえ記憶していない人もいるのではないでしょうか。こうして、あらゆるものがデータベース化され、自分の脳を使わなくなっています。実際、現代の人間の脳は、1万2000年前に農耕牧畜を始めた頃の人類の脳より10％小さくなっているとする説もあります。われわれホモ・サピエンスより、すでに滅びてしまったネアンデルタール人のほうが脳は大きかったこともわかっています。【Ⅴ】

（山極寿一『スマホを捨てたい子どもたち　野生に学ぶ「未知の時代」の生き方』による）

※　問題作成上の都合で、原文の一部に手を加えてあります。

問一　傍線部①～④のカタカナを漢字で書きなさい。

問二　傍線部A「行き当たりばったり」とあるが、この言葉の意味として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

① 浮足立った状態になること。
② 血気に逸（はや）った行動をとること。
③ 出たとこ勝負でのぞむこと。
④ おざなりな対応をすること。
⑤ 何事にも無頓着であること。

問三　傍線部B「先頭には、ぼくが一番信頼できる優秀な地元の人間をつけます」とあるが、それはなぜか。その理由を説明した次の文の空欄に入れるのに最も適切なものを、本文中から八字で抜き出して答えなさい。

［　　］をもっているから。

問四　傍線部C「二の次」とあるが、この言葉の類義語として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

① なおざり　② あながち　③ いたずら　④ さしずめ　⑤ えてして

国語（その十）

問五 傍線部D「もっと人間本来の能力を発揮できる環境をつくるべきだ」とあるが、どのような力を発揮すべきだと筆者は考えているのか。その説明を行った次の文の空欄に入れるのに最も適切なものを、本文中から六字で抜き出して答えなさい。

［　　］力。

問六 空欄**イ**に入れるのに最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

① 生地　② 素地　③ 見地　④ 裏地　⑤ 心地

問七 次の一文を挿入する場所として、最も適切なものを、後の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

つまり言葉を得たことは、外付けの記憶媒体を得たことと同じなのです。

① 【Ⅰ】　② 【Ⅱ】　③ 【Ⅲ】　④ 【Ⅳ】　⑤ 【Ⅴ】

問八 本文の内容と合致するものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

① 情報化の時代にあっては、子どもが人間の手の入っていない自然の中で過ごす環境を大人がつくる努力をする必要がある。

② 野生の世界では、自分が死ぬようなことにならないように一瞬で判断しなければならない事態に遭遇することがある。

③ 見えている自然ではなく見えていない自然が本来の自然であり、それを人間は身体全体を使って感じ取るべきである。

④ インターネット社会では、自分の知りたい情報を効率よく入手することができ、常に安全で快適に暮らすことができる。

⑤ 自分の脳で考えるという手間を省略するために、人間はテクノロジーを発達させて、大容量の記憶媒体をつくり出した。

国語（その十一）

第三問

次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

間違いなく恋愛は時として人が正しい道を歩むのを助けてきた。

このように(注)キルケゴールは、愛とは何かと人が理解を深めていくのを恋愛が助け導くのだと言う。恋愛は愛について理解を深めるきっかけになるということである。キルケゴールはレギーネと恋愛することによって、レギーネについて考えるだけでなく、そもそも愛するというのはどういうことかと①ジュクリョし、愛についての理解を深めることができたのであろう。

だが友情については同様のことは言われない。むしろその評価はまったく否定的である。

友情とは何であろうか？　空想であり、余計なものであり、むしろ災厄である！

友情についてA中立的に評価するキルケゴールだが、それのみならず、このように友情をネガティブに評価するキルケゴールもいる。恋愛に関する考察の質と量に比して、友情に関する考察は淡泊で乏しい。

キルケゴールは友情について深く考えずに終わってしまったと言わねばならない。だが私たちはこの点についてもう少し考えておく必要がある。特定の他者との付き合いなしに生活するというのは、実際、現代の状況においてはまず考えられないからである。イ キルケゴールは友情の否定的形態については考察した。利己心や感性と結びついた恋愛があるように、友情にも、利己心と結びついた関係がありうる。だが他方、恋愛に真の愛の理解へと通じるものがあり、肯定的に評価しえたように、友情にも隣人愛へと通じるB肯定的に評価しうる形態があるはずだからである。キルケゴールは友情の否定的な形態について考察するだけで終わってしまったが、私たちはその肯定的な形態についても考えてみなければならない。

恋愛が高次の愛の理解への道を拓(ひら)きえたように、友情もまた同様の道を拓きうると考えることができる。恋人と語らい、相手のために何ができるだろうかと考えるように、私たちは友人とも語らい、彼（女）のために何ができるだろうかと考える。人間とは何か、他者とは何か、倫理とは何か、尊厳とは何か、幸せとは何か、そういった様々な問題について、友情は恋愛と同様、様々なことを私たちに教えてくれるはずである。

友人のことを深く知っていくなかで、私たちは彼（女）がどのような特徴をもった一人の個人であるのかということだけでなく、どのような特徴をもった社会的存在である

国語（その十二）

かということも知るようになる。いかなる意味で社会的存在であるのかということも知るようになる。同時に自身もまた社会的存在であることを、いかなる意味で社会的存在であるのかということも知るようになる。友人の特徴や自分の特徴を知り、かつ共有するところも知る。彼（女）には彼（女）自身が必要とするものがあり、また社会的存在として必要とするものもある。それらを切り分けながら、また関連させながら彼（女）のことをより深く知っていく。その過程で自分のこともより深く知るようになる。

彼（女）が必要とするものは何か、それをどう与えたらよいのか。関係は今日で終わるわけではない。うまくいけば何年も何十年も続く。そうした持続的な関係のなかで、自身が友人に与えうるもの、与えるべきものは何か。持っているものをすべて与えてしまえばいいというわけでは決してない。それは関係を閉じることを意味するかもしれないし、友人はそれを望まないだろうから。自身もまた彼（女）に対して、彼（女）がもっているものをすべて与えてくれることを望まないであろう。こうして友人に対する愛は単に所有物の贈与だけによって測られるものではないことが理解されるであろう。かといって何も与える必要がないというわけでもない。では何を与えたらいいのか。与えることができるものは何か。友情はそうした贈与の様々な側面を見せてくれる。

とりわけお金を目指して生きることを強いられる現代においては、友情は容易にオトモダチ関係へと転落する危機に瀕（ひん）していると言えるかもしれない。お互いが自然的に欲望する富や権力であっても、それをたくさんもっている者同士はそれをたやすく②ユウズウしあうことができる。そうすることでお互いの富や権力をさらに増やすことができる。しかしだからこそ人はオトモダチではなく友人に大きな価値を認め、友人であろうとするのである。友人は、彼（女）が友人であるならば、オトモダチとしてではなくあくまで友人として見なされ、関わられることを望むであろう。友人でありたいと望む他者をオトモダチとして扱えば、友情はそこで終わり、友人は離れていくだろう。

こうして友情は人間の尊厳についても多くを教える。友情は、友人が何かのための手段として扱われるべきものではないことを知らせる。他の誰でもない単独者としての友人は、一個の人間がもつ尊厳を現前させる。彼（女）の尊厳は人間の尊厳をも開示するであろう。逆に友人をもたずオトモダチしかもたぬ者は、一人の人間の何たるか、尊厳の何たるか、贈与の何たるかを理解しない者である。［甲］においてこそ、友情は、人間の尊厳を知り人間を愛することを知るきっかけとして、この上なく重要なものである。

［ｘ］

「折り合いの悪い他者」との関わりについては、これは「真理」がシェアされず、人々の価値観やライフスタイル、関心の対象が多様化した現代において特に重要なものであ

国語（その十三）

る。折り合いの悪さを抱えながら、関係を持ち続け、そのなかで相手を理解し、自身の考えを深め、人生に反映させるにはどうしたらいいのか。私たちはこれについて友情から学ぶことができる。

ロ、神のない人間にとっては、友人が神が果たす役割をある仕方で（つまり神とは違う仕方で、というのも人間は神ではないから）代わりに果たすことも期待される。それはとりわけc傷ついた魂に関してである。人間の魂はこの暴力の世にあって時に傷つく。高次の精神へと達した魂であっても同様である。神があれば、神の正義や愛がその傷を癒やし、また強さを増すことができるだろうが、神のない人間にとってはそうはいかない。自分はそれまで進んできた道をなお歩み続けていいのかと迷う。傷ついた魂は、再度善を目指して立ち上がることができるであろうか。より③センレンされた善へと自分を方向づければ方向づけるほど、経済活動の自由は減る。ただでさえ生きづらい現代において、さらに生きづらくなる。そのなかで人はどのようにして魂を善に向けて生き続けることができるのか。自分は④ムボウな夢をみているのではないか、間違っているのは自分の方なのではないかと考え、認めてしまいそうになる。そんなときに友人が示してくれる慰めや認め、肯定はどんなに大きな力となることか。人間である以上友人に正義そのものや真理そのものを期待することはできないかもしれないが、傷ついた者が落ち着きを取り戻し、様々な事柄の連関を捉え直し、自信を回復するきっかけとなることはできる。友人とのそれまでの持続的な関係にはそうしたことが可能である。

（須藤孝也（たかや）『人間になるということ ――キルケゴールから現代へ』による）

（注）キルケゴール ―― デンマークの哲学者、思想家。

※ 問題作成上の都合で、原文の一部に手を加えてあります。

問一 傍線部①～④のカタカナを漢字で書きなさい。

問二 傍線部A「中立的」とあるが、この言葉の対義語として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

① 圧力的　② 俯瞰（ふかん）的　③ 偏向的　④ 総合的　⑤ 敷衍（えん）的

国語（その十四）

問三 空欄**イ**、**ロ**に入れるのに最も適切なものを、次の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選び、番号で答えなさい。

① しかし　② 確かに　③ むしろ　④ つまり　⑤ それから

問四 傍線部**B**「肯定的に評価しうる形態」とあるが、友人と交遊することはどのようなことにつながるのか。その説明として**適切でないもの**を、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

① 友人と交遊することは、恋愛が真の愛の理解へとつながっているように、隣人を真の意味で愛することにつながる。
② 友人と交遊することは、彼（女）と目的―手段関係に立つべきではないと知ることで、人間を愛することにつながる。
③ 友人と交遊することは、彼（女）がどのような存在であるのかを深く知ることで、自己を深く知ることにつながる。
④ 友人と交遊することは、彼（女）との持続的関係の中でお互いに富を与え合うことで、欲望を満たすことにつながる。
⑤ 友人と交遊することは、人間が個人としてだけではなく、社会的存在として生きていることを理解することにつながる。

問五 空欄**甲**に入れるのに最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

① 積極的な自由が非常に欲望されるにいたった現代
② 絶対的な権力がごく一部に集中するにいたった現代
③ 利己的な人間がのさばり、はびこるにいたった現代
④ 私的な利益が過剰に追求されるにいたった現代
⑤ 個性的な単独者が一般に認められるにいたった現代

国語（その十五）

問六 [X] に入る、次のア～エの四つの文を正しく並べたものとして、最も適切なものを、後の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

ア 友人であるからといって、あらゆる事柄について理解を共有しているわけでは決してないはずである。

イ だがそのゆえに人は、友情から折り合いの悪い他者との関わり方をも学ぶことができる。

ウ 他方、友人は「折り合いの悪い他者」でもあるだろう。

エ むしろ深く知れば知るほど、自他の違いはますます明確に知られるようになる。

① ア→ウ→エ→イ　② ア→エ→イ→ウ　③ ウ→ア→エ→イ
④ ウ→ア→イ→エ　⑤ ウ→イ→ア→エ

問七 傍線部C「傷ついた魂」とあるが、現代において、これを癒やしてくれるものは何だと筆者は考えているのか。本文中から十七字で抜き出して答えなさい。

問八 本文の内容と合致するものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

① 人間が魂を善に向けて生きつづけていくには、現代社会においても、神の正義と愛がなくてはならない。

② 高次の精神へと達することができている魂をもっている人間は、他者との関係の中で傷つくことはない。

③ 自分が持っているものを、すべて見返りを求めることなく彼（女）に与えることが、真の友情であり贈与である。

④ 恋愛と同じように友情が人間にとって必要不可欠なものであるということは、現代では誰もが認識している。

⑤ 「折り合いの悪い他者」と関わりをもつことは、多様な価値観をもった人間がいる現代では必要なことである。